ゾラ『四福音書(*Les Quatre Évangiles*)』における進歩思想と自然主義

宮川　朗子

> The Utopia of a modern dreamer must needs differ in one fundamental aspect from the Nowheres and Utopias men planned before Darwin quickened the thought of the world. Those were all perfect and static States, a balance of happiness won for ever against the forces of unrest and disorder that inhere in things. [...] But the Modern Utopia must be not static but kinetic, must shape not as a permanent state but as a hopeful stage, leading to a long ascent of stages.
>
> H. G. Wells , *A Modern Utopia,* 1905.

はじめに

エミール・ゾラ(1840-1902)の最晩年の作品群『四福音書』(1899-1902)には、それぞれの作品の最終部で理想的な共同体が描かれているが、完璧であるがゆえに変化がない伝統的ユートピアとは異なり、その理想に到るまで闘いや共同体の漸進的な変化に、より多くのページが割かれている。このことは、19 世紀において支配的であったダーウィン流の進歩思想が強く影響していると考えられてきたが、それは、この作品群に限らず、ゾラがとりわけ 1880 年代に強く主張した自然主義の理論や『ルーゴン＝マッカール叢書(*Les Rougon-Macquart*)』をはじめとする小説においても、認められる性格でもあった[1]。この観点から考えるなら、『四福音書』とそれ以前の著作との継続性を認めることができるが、実際、ゾラ研究においては、『四福音書』はそれ以前の作品と作風が異なるものと考えられてきたし、この作品群には、ゾラの自然主義の理論と矛盾する要素も多々認められる。

そこで拙論では、まずは、ゾラの創作の構想や『四福音書』全体に見られる進歩思想の特徴を明らかにする。そして、その進歩思想と矛盾する傾向を指摘し、その矛盾とこの作品群が受けてきた評価との関連性を導き出すことを目的とする。

そのためにまずは、ゾラの創作活動全般と『四福音書』の構想、そしてこの作品群に収められた小説から読み取ることができる進歩思想の表出に注目する。それらを確認した後、この作家が創作上の進歩として試みた新たな方法論の実践と『四福音書』以前からの創作上の指針である自然主義の原則との矛盾点を指摘する。最後にオクタヴ・ミルボーの『多産』に対する好意的な批評とそれに対するゾラの回答を確認しながら、この作品群の再評価の可能性について考えてみたい。

1. ゾラの小説における進歩思想

ゾラが科学に対して楽観的な信頼を寄せ、科学の進歩が人類の進歩を導くとすら考えていたことは知られているが、このような進歩の思想は、その創作活動にも顕著に表れてい

る。それは、この作家の三つの作品群の性格を年代順に追うだけでも確認できるだろう。まず『ルーゴン＝マッカール叢書』は、第二帝政下のフランス社会の様相を、『実験小説論(*Le Roman expérimental*)』中の言葉を使って言うなら、観察と実験によって記録した作品群であるのに対し、時代背景を第三共和政にほぼ確定できる『三都市(*Les Trois villes*)』は、第１巻の『ルルド(*Lourdes*)』の冒頭から、カトリックの信仰を失った僧として登場する主人公のピエール・フロマンが、新しい信仰を求める物語である。それは、最終巻『パリ(*Paris*)』において、主人公がそれまで疎遠になっていた実兄との関係をある事件をきっかけに回復し、兄の家庭で出会った若い女性に対する愛情から、僧としての身分を捨て市民として家庭を築くことによって見出されるという結末に至る。そして『四福音書』は、すでに新しい思想に育まれたピエールの子供たちの、カトリックの思想が根強く残る古い社会に対する戦いを描いている。『ルーゴン＝マッカール叢書』が、いわば過ぎた時代の社会の観察にとどまったのに対し、『三都市』では、同時代の社会の観察と未来に向けての新しい信仰の探究が描かれる。そして『四福音書』では、『三都市』の最終部で提示された、科学に基づく新しい精神によって未来の理想社会を築くための戦いが語られる。このような点から、ゾラの創作活動も、時を経るにつれ、ますます科学的精神が支配的になるという方向への進歩的展開が見られるといえるだろう。

また、『四福音書』の構想にも同様の展開が認められる。この作品群の第 2 巻『労働(*Travail*)』の草案中の記述がその例として挙げられる。

> La Fécondité qui peuple le monde, les parties aujourd'hui inhabitées, qui fait de la vie. Force de la femme
> Le Travail, qui organise et réglemente la vie. Il fait de la vie lui aussi. Force de la cité
> La Vérité, qui est le but de la science et qui prépare la justice. Force de la patrie(?)
> La Justice qui réunit l'humanité, la rassemble, la ramène à la famille unique (?) qui assure la paix et fait le bonheur final. Toute l'humanité
>
> [...]
>
> J'ai tout le siècle prochain, jusqu'à l'utopie — Pour le travail, tout le développement de la Cité futur. Pour la vérité, toute la conquête d'un siècle avec le recul de l'erreur, la science de plus en plus triomphante — La justice toute l'humanité, les peuples se fédérant revenant à la famille unique la question du race étudiée et résolue, la paix universelle à la fin[2].
> 多産は世界を、今日人の住んでいない部分を人で満たし、生命を生み出す。女性の力
> 労働は、生命を組織し統制する。これもまた生命を生み出す。都市の力
> 真実は、科学の目的であり、正義を準備する。祖国の力（？）
> 正義は人類を統合する、人類を集結させ、平和を保障し、最終的な幸福を生み出す唯

一の家族（？）に戻す。人類のすべて

[...]

私は次世紀全体をユートピアにまで到達させる ——労働では、未来都市の発展のすべてを。真実では、過ちの後退とともにますます勝利を収める科学による時代の征服のすべてを —— 正義は人類のすべてを、連帯する諸民族が唯一の家族に戻り、人種問題が検討され、解決されながら、最終的な世界平和に到るまで。

この草案から、それぞれの作品のタイトルが示す思想の表象を、女性から都市、都市から祖国、そして人類全体へと拡張させる意図が明白に読み取れる。さらに、この意図は、『真実』を締めくくる一節にも現れる。

Et, après la Famille enfantée, après la Cité fondée, la Nation se trouvait constituée, du jour où, par l'instruction intégrale de tous les citoyens, elle était devenue capable de vérité et de justice[3].

そして、家族が生まれた後には、都市が作られ、国家が構成された。あらゆる市民にいきわたる教育により、真実と正義が可能となった日に。

このように作品群を発展段階的に説明する数多くの例は、小説の構想が、進歩的に展開されていることを示している。

では作品自体も同様な傾向が認められるだろうか。筆者は別稿で、『真実』における理想社会が、進歩のための闘いの最終段階に現れ、一見完璧な理想が実現されたかのように見える最終部の共同体のイメージにも、さらなる進歩の可能性を予感させる要素を挿入していることを指摘しておいたが[4]、この傾向は、『四福音書』の全作品にも認められるように思われる。例えば『多産』では、共同体の創始者である夫婦の子がアフリカに開拓に向けて出発する場面で幕を閉じることにより、共同体の更なる拡張を予感させている。(cf. *ŒCNM,* 18, 394-396) また『労働』の最終章では、残された発明として飛行術、電信への言及がある。(cf. *ŒCNM,* 19, 338)これらの共同体は、それゆえ、理想が完全に実現された都市像なのではなく、絶え間ない進歩こそを理想とするユートピアなのである。この点については、最終章の理想的な共同体像だけではなく、冒頭でのこれらの共同体の描写と比べると、より明白になる。フランスのとある小さな町として設定されたこれらの共同体は、当初、荒れて忘れられた町として描かれる。そして、これらの小説の大半を占める主人公の闘いによって、共同体が理想的な姿に徐々に変わってゆくのである。また『労働』の最終章において、臨終の床につくリュックを囲んで三人の女性が語る「とある巨大な共和国」「隣接する広大な帝国」「この前の戦争」(cf. *ŒCNM,* 19, 351-354)という三つの血生臭いエピソードは、その背景となる平和な共同体のイメージと、その聞き手である共同体の創始者リュックの穏やかな最後を乱すような印象さえ与えるが、これらはなかんずく、理想

的共同体には戦いが不可欠であることを示唆している。ゾラのユートピアには、おそらく決して到達することのない完璧な理想に近づくための闘いも含まれるのである。

2. 自然主義の危機：ユートピアの均質性と大衆小説的性格

ゾラの作品の構想と『四福音書』の筋立てには、これまで見てきたように、確かに進歩的な性格は認められるが、この最後の作品群においては、新たな狙いも明確にされている。それは、自分の作品を大衆(peuple)に広めるというものだ。確かにそれまでも、ゾラは大衆を描きはしたし、大衆に対する好意的な姿勢をとってきたが、自分の読者層として意識したことはなかった。しかし、1927 年に娘婿のモーリス・ルブロンによって発見、同年 10 月 1 日の『メルキュール・ド・フランス』に発表された『四福音書』のごく初期の構想の中で、狙う読者層についてあえて言及している。

> **L'intérêt pour le public, c'est ce que je veux. Il faut que ces romans n'allaient pas qu'à des lettrés, mais passionnent les femmes. Donc, nécessairement tout un côté dramatique et tendre mais d'une intensité décuplée[5].**
> 読者にとっての興味、それが私の望むところだ。これらの小説が教養人だけに行かないようにし、女性を熱狂させるようにしなければならない。だから、必然的にドラマティックで優しい側面があるが、それは十倍の強度を持たなければならない。

さらにあるインタヴューでは、大衆が次世代の担い手であると言う。

> **La société actuelle est dans une décadence irrémédiable. Le vieil édifice craque de tous côtés. Chacun le reconnaît, non pas seulement les théoriciens du socialisme, mais aussi les défenseurs du régime bourgeois. Le christianisme a fait une révolution qui a bouleversé le monde romain en supprimant l'esclavage et en y substituant le salariat. C'était un progrès immense, car il élevait le plus grand nombre à la dignité d'hommes libres. Dans les conflits quotidiens du capital et du travail, le définitif triomphe appartiendra au travail[6].**
> 現在の社会は、修復できないほど退廃した状態だ。古い組織はあちらこちらで崩れている。社会主義の理論家たちだけでなく、ブルジョワ体制の擁護者たちも、それぞれそのことを認めている。キリスト教は奴隷制度を廃止し、賃金制度に入れ替えて、ローマ世界を一変させた革命を成し遂げた。それはとてつもなく大きな進歩だった、というのも、大多数を自由人の高位にまで引き上げたからだ。資本と労働が日々繰り広げる紛争においては、最終的な勝利は労働者のものとなるだろう。

ここでもやはり、世界の歴史を進歩的に捉え、以後、世界は大衆の手になるとする見方

が表れているが、『正義』におけるマルクの戦いへの意思の表明にも、同様の見解が認められる。

> En 1789, victorieuse de la noblesse agonisante, la bourgeoisie l'avait remplacée ; et, pendant un siècle, elle venait de garder tout le butin, en refusant au peuple sa juste part. Maintenant, son rôle était fini, elle le confessait elle-même, en passant à la réaction, affolée à l'idée de rendre, terrifiée par la montée de la démocratie, qui devait l'emporter. [...] Et, dès lors, les énergies de demain se trouvaient dans le peuple, c'était là que dormaient des provisions, des réserves immenses d'hommes, d'intelligences, de volontés, encore endormis. (*ŒCNM*, 20, 113-114)
>
> 一七八九年、瀕死の貴族階級に打ち勝ち、ブルジョワジーがそれに代わった。そして一世紀の間、ブルジョワジーは大衆に正当な分け前を与えるのを拒否して、全ての獲得物を手中に収めてきたところだった。しかし今やその役割は終わった。正当な分け前を返すという考えに逆上し、自分たちを凌駕してしまうに違いない民主主義の台頭に怯えて反動の側に回ったことで、ブルジョワジー自体がそのことを告白していたのだ。[...] そして、以後、未来のエネルギーは大衆の中にあった。蓄えられた力、いまだ活用されていない人と知性と意思の巨大な備蓄が潜んでいるのはそこなのだ。

ゆえに、読者層を大衆に広げるという狙いは、ゾラがその進歩的歴史観から導き出した、大衆に対する期待からだといえるが、この同時期に、小説作法の進化も企図され始める。先に挙げた、『四福音書』の初期の構想には、次のような一節がある。

> Les dangers. —— Ennuyer le public, faire une œuvre factice et morte, du moment que je sortirai de l'humanité, de la vérité vraie. Rien n'est plus glacial que les fantaisies, que les symboles trop longtemps prolongés. Une « Icarie » est illisible. Et le rêve de la fraternité universelle fait sourire. Donc, c'est là le grand écueil, qui m'a fait hésiter un instant à me lancer dans ce grand travail ; et si je passe outre, c'est que le danger m'attire et que justement le renouvellement de ma manière peut être dans cette formule nouvelle et inquiétante[7].
>
> 危険 —— 読者を退屈させること、わざとらしく生気のない作品を作ること。人間から、本物の真実から離れてゆく時に。気まぐれな空想やあまりにも延々と続く象徴ほど凍りつかせるものはない。「イカリア」のようなものは読むに堪えない。そして普遍的な友愛の夢は笑わせてしまう。だから、私をこの偉大な仕事に身を投じることを一瞬ためらわせるのは、ここ、この大きな暗礁なのだ。そしてもし私がそれを無視して続けるなら、それは、その危険が私を惹きつけ、私の作風の刷新がまさにこの新しく不安にさせるような様式の中にあるからなのだ。

狙う読者層の拡大とともに、小説作法の刷新の必要にも迫られるのだが、その刷新によって、作品が夢の世界や友愛のお安い物語になってしまう危険があることを察知している。そして実際、この小説作法の「刷新」は、進歩の思想とゾラ自身の芸術観とその実践との間でさまざまな矛盾を生じさせることとなる。

まず「作風の刷新」という点について考えてみるならば、読者を大衆にまで広げるために、より読みやすい物語を想定しているのだが、同時に、「気まぐれな空想やあまりにも延々と続く象徴ほど凍りつかせるものはない」とあるように、通俗的な物語に陥ってしまう危険を警戒している。それでもなお、「その危険が私を惹きつけ」るゆえ、結果的に、ゾラはある程度この「刷新」を試みているように思われる。その傾向が顕著に表れるのが登場人物である。『ルーゴン＝マッカール叢書』において、登場人物を決定づけていたのは、自然主義の理論の基本的な主張である「人種、環境、時代」であり、なかでも人種に関しては、遺伝という形で、そのさまざまな出現を描き出していた。とりわけアルコール中毒の遺伝はこの作品群の数多くの小説のテーマにすらなっている。例えば、肉体的精神的堕落（『居酒屋(*L'Assommoir*)』のジェルヴェーズ）、殺人への傾向（『獣人(*La Bête humaine*)』のジャック）、特殊な才能の開花（『制作(*L'Œuvre*)』のクロード）などが挙げられよう。

『四福音書』においても、基本的な三つの要素については認められているように思われる。つまり、この作品群のそれぞれの主人公は、それに先立つ作品群『三都市』の主人公、ピエール・フロマンの息子たちであり、父親同様、科学に対する信頼と民主的な新しい思想に育まれているが、それは父親と同じ額をしていることによって象徴されている。『多産(*Fécondité*)』のマチュウは「le front des Froment, large et haut, en forme de tour 広く高く、塔のように秀でたフロマン家の額」(*ŒCNM,* 18, 24)を、『労働(*Travail*)』のリュックは「son front en forme de tour 塔のように秀でた彼の額」(*ŒCNM,* 19, 23)を、『正義(*Justice*)』のマルクも「le haut front, le front en forme de tour de la famille 高い額、この家系固有の塔のように秀でた額」をしているのである。(*ŒCNM,* 20, 21)

さらに、彼らによって築かれた共同体の住民も、次第に皆似てくるようになる。住民が、その数の多さにもかかわらず、フロマン家の血筋を引く者が大多数を占める『多産』の場合は説明するまでもないが、『労働』においては、工場の所有者とそこで働く労働者、その街の商人たち、農民たちなどの間の対立は、階級を超えた結婚によって解消され (cf. 『労働』第 3 部第 2 章）、そのような和解の結婚をする若者たちはどこか皆似ている。例えば、共同体の第二世代で、最初に階級を超えて結婚した労働者階級出身のナネは「D'une intelligence vive, d'une bravoure d'entreprise toujours en éveil. (頭の回転が速く、常に何かを試みる勇気が冴えている。）」(*ŒCNM,* 19, 257)そして、その妻となるエンジニアの娘ニーズと並ぶとき「Et ils étaient, aujourd'hui encore, blonds et frisés, ils riaient toujours d'un rire clair, l'air semblable, comme appareillés. (そして彼らは、今日でも、ブロンドの巻き毛で、いつも澄んだ笑い声で笑い、仲睦まじく似たような雰囲気をしてい

た）」（*ŒCNM,* 19, 257)。あるいは、労働者の息子リュシアンは「c'était un beau et fort garçon de vingt-trois ans（たくましく頑強な23歳の青年）」（*ŒCNM,* 19, 262)で、その妻となるブルジョワの娘ルイーズは、「très active, très entreprenante, s'occupant sans cesse dans la maison en disant que la paresse la tuerait.（とても活発で、とても積極的で、怠けていては死んでしまうと言ってたえず家事をしている）」(*ŒCNM,* 19, 262)、「cette jolie fille, si alerte, si souriante（こんなにも溌剌として、こんなにもにこやかなこのきれいな娘）」(*ŒCNM,* 19, 263)。さらに、労働者の息子ルイと肉屋の娘ジュリエンヌは、「Elle, forte, la chair blanche, la face rayonnante de santé, s'épanouissait d'aise, dans l'étreinte passionnée de ce gaillard vigoureux, au visage tendre.（彼女は、肉付きがよく、色白で、健康で顔色はかがやき、この優しい顔をしたたくましい男に情熱的に抱かれ、幸福で一杯だった）」（*ŒCNM,* 19,274)。青年たちは皆たくましく、娘たちは皆にこやかで美しい。そして、男女とも健康で顔色は輝いている。それは、階級間の和解の象徴というだけでなく、共同体の理想的な進歩により、過酷な労働や生活環境が人体に与えるダメージを与えなくなったことも表している。共同体の過去を知るジュリエンヌの母フォシャール夫人は、「Dans ce temps-ci, les fils ne ressemblent guère aux pères. Voyez comme il danse! Jamais ils ne connaîtra le froid et la faim（近頃は、息子たちは父親に全く似ていない。彼[=ルイ]が踊るのをごらんなさいよ！彼らは寒さやひもじさを覚えることは全くないでしょう）」（*ŒCNM,* 19, 275. 鍵括弧内は引用者による。）と言う。この共同体の人間は、進化する存在であると同時に、進化するにつれ、身体的にも似てくるのだ。

さらに、進化とともに人々が互いに似通う傾向は、精神面にも認められる。

> Au lieu de l'imbécile imagination du péché originel, de l'homme mauvais qu'un Dieu d'illogisme punit et doit sauver chaque pas, entre la menace d'un enfer enfantin et la promesse d'un paradis menteur, il n'y avait plus que l'évolution naturelle d'une espèce d'êtres supérieurs, simplement en lutte contre les forces de la nature, et qui les vaincront, qui les soumettront pour leur bonheur, le jour où cessant leur guerre fratricide, ils vivront en frères tout-puissants, après avoir douloureusement conquis la vérité, la justice et la paix. (*ŒCNM,* 19, 292-293)
> 原罪そして不合理な神が、子供じみた地獄の脅威と虚偽の天国への約束との間で絶えず罰したり救ったりしなければならない悪しき人間という馬鹿げた想像物の代わりに、もはやより良い人間の種の自然の進化しかなくなった。その進化は、単に自然の力に対して戦い、それに対して勝利を収め、人間の幸福のためにそれを従属させるだろう。人々の兄弟殺しの戦争が終わる日に、痛ましくも真実、正義、平和を獲得した後に、人々は全能者として、兄弟のように仲良く暮らすだろう。

ここでは共同体の住民がカトリシスムから解放され、それにともなって、人間という種族

そのものが進歩するとされている。人間は進歩する存在であると同時に、いずれは皆「全能者」となり「兄弟のように暮らす」のである。

人物を決定づけるものとして、遺伝が支配的だった『ルーゴン＝マッカール叢書』において、アルコール中毒の遺伝は、さまざまなストーリーの着想源となり、それが読者をひきつけるゾラ固有の物語を構築させていた。しかしこの『労働』において、支配的な遺伝は共同体の創始者の良き遺伝のみで、その遺伝が共同体をつくりあげ、さらにその環境が人間を改善させるのだが、それは均質的な人間を作り上げる要因にもなっている。この特徴は、『四福音書』の全ての小説に見出されるが、このように決定されてゆく登場人物は、『ルーゴン＝マッカール叢書』の登場人物ほど複雑ではなくなる。実際、『四福音書』の登場人物は、善人と悪人の差が明確で、誠実で愛あふれる善人は美しく光り輝いているのに対し、悪徳に染まった人物は、常に暗い影を引きずっている。そして常に、最終的には善人が悪人を圧するのだ。それとともに、共同体自体も、当初の暗く非衛生的な状態から、隅々まで明りで照らされた清潔な環境へと変化するのである。

このような善人の悪人に対する優勢やまばゆい光が駆逐する陰は、物語の最終部においてのみ顕著となるが、物語の冒頭においては、この地位は逆である。この逆転は、群衆(foule)という流動的な要素によるように思われる。『労働』において、主人公リュックは、共同体の運営を始めた当初、川の汚染問題で無罪を勝ち得ながらも、理解のない住民たちから追いかけられ、石を投げられる。しかし、共同体が理想に近づく物語の終盤になると、この同じ住民たちが、共同体の祭典に幸福な様子で参加するのである。また『正義』の前半における群衆は、逮捕されたシモンに罵声を浴びせるが、終盤に差し掛かる頃、真犯人ゴルジアスに罪を告白させ、シモンの帰還を讃えるのである。この群衆の変化は、主人公の共同体における地位の確立と連動するのだ。ここには、ある強力な力が、集団の向かう先を操作できることが示唆されている。そしてここにこそが、ゾラがこの小説群を制作した意図が読み取れる。この作品群の執筆、発表と並行して、ゾラはドレフュス事件に参加しており、真実を明らかにし、正義を実現することの難しさを痛感していた。真実と正義によって共同体を導くヒーローを描くことは、自らが参加した運動と創作活動とを連動させ、作品を現実により深くかかわらせ、さらにはそれを動かすことを目論んだとしても不思議はないだろう。

そしてこの時、福音書という古い書物の形態をとった意図も理解できよう。つまり人々に馴染み深い書物を書きなおすことで、新しい思想をより多くの人々受け入れやすくさせようとしたのだ。筆者は、『四福音書』における聖書のイメージやたとえ話の再利用について別稿で論じておいたが[8]、登場人物の性格をより明瞭かつ単純にし、簡単に教訓を引き出せるようなエピソードを盛り込むことで、そこに込められたメッセージは、より広く大衆に理解されることが期待できる。

ところで、このような傾向の物語は、ユートピア小説にも見出される特徴でもある。トーマス・モアの『ユートピア』やカンパネラの『太陽の都』に代表される古典的なユート

ピア物語は、大抵の場合、ある旅人が、事故や災害などにより、未知の島や都市に偶然たどり着き、そこでの平等で平和な社会に驚き、最後は国に帰り、その様子を故郷の人々に語るというストーリー展開を取る。そして描かれた理想社会の住人は、偶然訪れた旅人から見ると、衣服は古風だったり奇妙だったりするが、旅人の国の人間よりもずっと幸福で健康で、みな似ているのだ。読者により受け入れやすくさせるための小説作法の「刷新」によって造形された『四福音書』の登場人物は、物語の後半になればなるほど、伝統的なユートピア小説のそれと共通項が多くなる。

しかしながら、まさにこの点が、芸術的観点から問題となる。ユートピア小説に対する批判として、登場人物の没個性化、均質化がしばしばあげられるが、このような特徴は『四福音書』の登場人物にも当てはまってしまうし、大体、ゾラが自然主義的な立場を最初に示した評論集『わが憎悪(*Mes Haines*)』（1865-1866 年）において、共同体のための芸術を説くプルードンに対し、

> Je conseille aux socialistes démocrates qui me paraissent avoir l'envie d'élever des artistes pour leur propre usage, d'enrôler quelques centaines d'ouvriers et de leur enseigner l'art comme on enseigne, au collège, le latin et le grec. Ils auront ainsi, au bout de cinq ou six ans, des gens qui leur feront proprement des tableaux, conçus et exécutés dans leurs goût et se ressemblant tous les uns les autres, ce qui témoignera d'une touchante fraternité et d'une égalité louable. (*ŒCNM*, 1, 741)
>
> 自分たちの使用法に従って芸術家を育てたがっているように見える民主的社会主義者の方々に、私は数百人の労働者を徴募して、あたかも中学でラテン語やギリシャ語を教えるかのように芸術を教えるよう勧めよう。そうすれば、5、6 年後には、彼らの好みに従って着想され、実行された絵を的確に描いてくれるような人々が手に入るだろう。感動的な友愛と賞賛に値する同質ぶりを表現するような絵を描く人々が。

と、きつく皮肉っていた。この批評から 30 年以上の年月が経ち、ゾラの思考においては、社会や人類全体の幸福の問題がより重要性を占めるようになっていたとはいえ、この問題と独自の個性の開花としての芸術との両立の問題は、解決されていないのだ。

そして実際、このような創作上の「刷新」は、自然主義の理論としばしば矛盾する。例えば『正義』において、幼いゼフィランを殺害した真犯人としてゴルジアスが浮上したのは、マルクの勘からであり、この人物を有罪とする決め手は、その後発見される。実証性と論理性を重視する自然主義の理論から考えるなら、この展開は問題視されうるだろう。

『四福音書』において、このような実証性と論理性に欠く例は、これだけにとどまらない。例えば『労働』において、身体が不自由で数十年来言葉を発することがなかったジェロームが、死に際になって突然口を開き、労働者たちに自分の財産を返すよう遺言を残す。また『正義』において、瀕死のセバスチャンは、その母親がゴルジアス有罪の決め手とな

る習字の見本をマルクに託すとたちまちに回復してしまう。こういった奇跡譚は、古くからの口承の大衆文学を思わせるゆえに、物語の大衆性をねらうゾラの意図にはかなっているとはいえ、この作家が主張してきた自然主義の立場からは矛盾するものだ。

自然主義の原則との矛盾はこれだけにとどまらない。進歩はゾラの自然主義の理論にも影響が見られる思想であるが、各小説の最終部で提示した、主人公の長い闘いによって築かれつつある理想社会は、進歩の流れに逆行するような古い共同体のイメージに重なるのである。このイメージは、例えば『多産』において、主人公夫婦の娘ローズが、兄とその婚約者を家族そろって駅まで迎えに行く計画を語る際に現れる。

> Comprends donc qu'Ambroise et Andrée, c'est, comme dans les contes, le royal couple d'un empire voisin. Mon frère Ambroise, ayant obtenu la main d'une princesse étrangère, l'amène pour nous la présenter... Alors, naturellement, afin de leur faire les honneurs de notre empire, à nous, Frédéric et moi, nous allons à leur rencontre, accompagnés de toute la cour. (*ŒCNM,* 18, 291)
> アンブロワーズとアンドレは、おとぎ話のように、隣の帝国の王室カップルなのよ。アンブロワーズ兄さんは、外国の王女様との結婚を認められて、私たちに紹介するために連れてくるのよ... だから、当然、私たちの帝国でおもてなしするために、私たち、フレデリックと私は、宮廷の王族全員を従えてお迎えに行くのよ。

主人公夫婦が多くの子供を産むことによって築いた大家族は、おとぎ話に出てくる王家のイメージで語られるが、この小説を読んだシャルル・ペギーも、この大家族のイメージに君主制の起源のそれを重ねている[9]。さらに、註 2 を付した引用中の、正義の実現によって統合される人類が、「唯一の家族」に戻るとは、――ゾラ自身括弧の中に疑問符を入れており、かつ『正義』は作者の死によって書かれなかった作品であるという事実を考慮したとしても―― 『四福音書』のそれぞれの作品の最終部で描かれた家族の集まりの場面で、ある程度実現されている。そしてこれらの場面で、主人公、あるいは主人公夫婦は、「長老(patriarche(s))」(*ŒCNM,* 18, 388 ; 19, 329 ; 20, 391)とされ、彼らを取り巻く家族と共に、あたかも原始共同体の様相を呈するのである。

このように見てゆくと、ゾラの創作の新しい展開は、発展的と言うよりも前段階を無効にし、別な作風を試しているとも考えられるかもしれない。しかしそれでもなお、こういったゾラの新たな作風をオクタヴ・ミルボーは、肯定的に評価している。

> Ce qui crie, ce qui proclame la beauté inaccoutumée de cette œuvre, nouvelle, même dans l'œuvre de Zola, ce qui fait de ce livre un livre différent, non seulement des autres livres, mais du livre en soi, ce n'est pas l'affabulation dramatique, contre laquelle, d'ailleurs, nous pourrions émettre quelques objections ; c'est à la fois un

sentiment nouveau et une vieille idée, une prescience du futur, une intelligence de ce qui doit être, par conséquent, une prophétie et un ordre. [...] Aussi nous ne devons pas nous arrêter à ce que nous pouvons trouver d'illogique et d'arbitraire en cet Évangile. L'arbitraire est ici une nécessité supérieure de composition. Ce qui partout ailleurs serait jugé comme une convention, n'est que de la simplicité, de la simplicité voulue, la simlicité héroïque qui convient aux œuvres éternelles[10].

ゾラの作品においてさえ新しい、この作品のまれな美しさを高らかに叫びあげ、如実に示しているもの、この本を他の本だけでなく、本というもの自体とも異なる本としているもの、それはドラマティックな筋立てではないし、大体そういった筋立てに対しては、我々はいくつかの反論を出すことができるだろう。つまりそれは、新しい感情であると同時に古い思想であり、未来の予知であり、あるべき知性であり、つまり予言と秩序なのだ。[...] 同様に、この福音書における非論理的で恣意的だと思うことにも目を向けるべきではないだろう。恣意的なものは、ここでは作品構成よりも上位にある必要なものだ。大抵、いたるところで約束事としてみなされるようなものは、簡素さ、意図的な簡素さ、永久に残る作品にふさわしい思い切った簡素さのみに由来するものなのだ。

ミルボーは、ゾラのこの作品に、従来の本にはない新しさと美しさを読み取っており、この評に喜んだゾラも以下のように自分の作品を説明している。

Je connais bien les défauts de mon livre, les invraisemblances, les symétries trop volontaires, les vérités banales de morale en action ; et la seule excuse est celle que vous donnez : la construction particulière que m'a imposée le sujet[11].

私は自分の本の欠点を承知しております。真実味に欠けていること、対称的にしようと意識しすぎていること、実践される道徳が自明の理になってしまうこと。それでもただ一つ言い訳できることが、あなたが書いてくださったことです。つまり、主題が私に特異な構成を取らせたことです。

この作家が、その同時代の多くの知識人が試みたような、従来の福音書の書きかえを試み、新たな時代にかなう『四福音書』を著したのは、小説のレベルを超えた「本」を書くことだった。だから、この作品群を小説として読むことには少々難があるのだ。さらに、『四福音書』と他のゾラの作品との間にある作風の違いを、デヴィッド・バギュレーは、しばしば評されてきたような、安易な理想主義的性格への変化にあるのではなく、小説的な要素よりも戦闘的な共和主義的メッセージが主となっていることにあるとする。バギュレーは、スーザン・スレイマンの問題小説(roman à thèse)の理論を参照しながら、もはや『四福音書』が問題小説のレベルを超え、小説で展開された命題(thèse à roman)であるとし、

小説家としてのゾラは、この共和主義の福音書の中に隠れてしまったにすぎないと評価している[12]。この評価は、先に指摘した、この作家のドレフュス事件への参加を考える時、一層説得力を持つ。『四福音書』は、正義の実現が困難な中で、その運動を活性化させるための「本」ではなかっただろうか。

しかしながら、当時も現在でも19世紀の代表的な小説家として評価されるゾラの地位やこの作品群がとる物語の体裁は、小説の範疇を超えたこの「本」の性格に気づきにくくし、ゾラ固有の自然主義的作風すら裏切るようにみえる単純な人物描写や紋切り型の多用は、「思い切った簡素さ」の美として評価することも難しくしているのである。

おわりに

『四福音書』は、多義性や表現の豊かさ、思想的な議論の深さといった優れた小説として通常考えられている指標をよりどころとするならば、低く評価されてしまうだろう。さらに、自然主義の原則とあからさまに矛盾し、『ルーゴン=マッカール叢書』の小説ほどの、読者の興味を惹きつけつづけるストーリー展開がないこの作品群は、ゾラの小説を好む読者からも遠ざけられてしまうだろう。

しかしながら、ゾラが『四福音書』を、小説以上のものにしようとしていた意図とそれを実践していたことは明らかであり、ミルボーが評するように、これは、新しさと古さ、予言と秩序という矛盾する要素の緊張関係の上に立つ独特の文学なのである。この点をバギュレーは、スレイマンの問題小説の理論をよりどころとして評価したが、この作品群の再評価の可能性は、この批評の方向の延長上にある観点、つまりイデオロギーの小説化とその効果や読者とのコミュニケーションの可否などにおいて見出せるだろう。それは、先に挙げた優れた小説の指標とはおそらく異なる方向にあるが、だからこそ、以後『四福音書』を研究することは、我々が文学作品を評価する際の基準に再考を促すことにもなる。

そしてこの時、ミシェル・レモンが小説の危機についての研究[13]において指摘した、自然主義小説内部にあった分裂の前兆を危機としてではなく、小説の新たなジャンルへの飛躍として評価できるかもしれない。一見注目すべき価値がないように思われる作品の分析こそが、一見絶対的であるかのようにみなされている価値基準を見直すことを可能にするものである。

註

1 ダーウィニスムは、『四福音書』以前の『ボヌール・デ・ダム(*Au Bonheur des dames*)』(1883年)や『ジェルミナル(*Germinal*)』(1885年)において主に言及され、ゾラがその知識を得たテクストもすでに明らかになっている。(cf. ZOLA, Émile, *Les Rougon-Macquart.* tome 3, Gallimard : Bibliothèque de la Pléiade, 1964, p. 1667-1735,

1803-1940. また、ゾラの作品におけるダーウィニスムについては以下の研究を参照のこと。BEST, Janice, « Le naturalisme est-il un nihilisme? », *Les Cahiers naturalistes,* 2003, p. 49-57. NIESS, J, Robert, « Zola et le capitalisme : le darwinisme social. », *Les Cahiers naturalistes,* 1980, p. 57-67.

[2] ZOLA, Émile, « Travail /Ébauche », *Œuvre. Manuscrits et dossiers préparatoires. Les Évangiles. Travail. Dossier préparatoire.* Bibliothèque nationale, Manuscrits, NAF 10333, f° 348. 参照：
http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90797896/f372.zoom.r=.langFR (vue 372)

[3] ZOLA, Émile, *Vérité.* 1902. In ZOLA, Émile, *Œuvres complètes,* tome 20, MITTERAND Henri (s.l.d.), Nouveau monde éditions, 2009, p.392. （尚、この全集は以後 *ŒCNM* と省略し、巻号とページ番号のみを記すこととする。）

[4]宮川朗子「ゾラ『真実(*Vérité*)』における歴史とユートピア」、『広島大学大学院文学研究科論集』、第 73 巻、2013 年、35 - 50 頁。

[5] LE BLOND, Maurice, « Les Projets littéraires d'Émile Zola au moment de sa mort d'après des documents et manuscrits inédits », *Le Mercure de France,* 1er octobre 1927, p. 11.

[6] ZOLA, Émile, *Entretiens avec Zola,* textes réunis et annotés par SPEIRS, E. Dorothy et SIGNORI, A. Dolorès, Les Presses de l'Université d'Ottawa, 1990, p. 196.

[7] LE BLOND, Maurice, *op. cit.*

[8] Cf. MIYAGAWA Akiko, *Réalisme critique et utopie romanesque : l'œuvre de Zola postérieure aux* Rougon-Macquart, Lille : Atelier national de reproduction des thèses, 2003. また、ゾラと聖書の問題については、以下の研究書に詳しい。ANFRAY, Clélia, *Zola biblique,* Les Éditions du Cerf, 2010.

[9] PÉGUY, Charles, « Les Récentes œuvres de Zola » (1899), In PÉGUY, Charles, *Œuvres en proses complètes,* tome 1, édition présentée, établie et annotée par Robert BURAC, Gallimard : Bibliothèque de la Pléiade, 1987, p. 256.

[10] MIRBEAU, Octave, « Fécondité », *L'Aurore,* 29 novembre 1899, p. 1.

[11] ZOLA, Émile, *Correspondance,* tome X, B. H. Bakker (s.l.d.), Les Presses de l'Université de Montréal, 1995, p. 100.

[12] BAGULEY, David, « Du récit polémique au discours utopique : l'Évangile républicain de Zola », *Les Cahiers naturalistes,* n°54, 1980, p.106-121.

[13] Cf. RAIMOND, Michel, *La Crise du roman des lendemains du naturalisme aux années vingt.* José Corti, 1985.